

陶硯からみる古代官衙について  
- 円面硯の大きさからみる機能を中心に -

文学研究科 文化財学専攻 2 年 M1613001 大矢健太郎

古代官衙において文書行政が活発に行われるようになり役人にとって文書を書くための道具は必需品であった。文書行政を行う上での道具としては紙・筆・硯・墨といった文房四宝をはじめ刀子や木簡などがあげられ、その中でも硯は、官衙をはじめ、寺院、住居跡など幅広い場所からの出土がみられ、出土量や種類も大変豊富であった。

その硯の中でも古代においては須恵器などの陶硯が主に使用されていた。この陶硯をみていく中で円面硯は定形硯として都城をはじめ官衙遺跡からの出土がみられ古代における陶硯の主流であったと考えられる。この円面硯を見ていく中で大型品から小型品と幅広い大きさのものが出土していることや型式に対しても脚があるものやないものをはじめ作りが豪華なものといった種類が豊富な点に注目した。

円面硯の大きさを計測するにあたって、時期別による分類の方法と大きさの計測方法について記載し、実際に墨を磨って使用する円面硯の硯部と脚である脚部を計測した。検討する地域は西と北において重要な地方官衙であった大宰府と多賀城擁する陸奥国府、古代における都城である。

これら大宰府・陸奥国府・都城の円面硯の大きさの特色から比較を行った。その結果、都城・大宰府の円面硯は、7 世紀後半から使用がみられはじめ 8 世紀前半の繁栄期、8 世紀後半以降の衰退期という流れがみられた。その一方で陸奥国府では、7 世紀後半から使用がみられはじめ 8 世紀前半の繁栄期、8 世紀後半以降大きな小型化がみられないことから停滞期という流れを確認した。

よって都城・各官衙における円面硯の大きさの変化の流れや平城宮や大宰府政庁などの中心施設から巨大な円面硯がみられる点などをはじめとして、また、その他の円面硯の特色等から検討を行っていった結果、円面硯には権力的象徴の意味があり円面硯にはみせる機能性があり、時代を追っていく上で使いやすさを求めるため小型化していき風字硯にうつりかわっていくのではないかと考えた。そして、機能性を考える上で、周辺官衙との比較。円面硯と使用時期が並行する転用硯と後続する風字硯との大きさの比較。円面硯には墨の付着がみられない未使用品がみられることから未使用品との比較。硯の源流である中国における硯の出土状況との比較などをはじめとして円面硯の機能性について検討を行っていった。